



【朝さろん】 80th morning

『存在の耐えられない軽さ』 ミラン・クンデラ

2018年5月13日(日)@渋谷
参加者:11名、芹沢(主宰)、松村(進行)

朝さろんは、参加者全員で、

- 1、作品を通り一遍の理解から解放し、わかった気にならず、むしろどこまでも“わからない”という疑問をたいせつにしながら、ていねいに鑑賞し、対話する協同の営みです。
- 2、作品に即してじっくりと部分(ディテール)と全体を行ったり来たりしながら、作品内部に設けられている空白を埋めていき、作品が内部に抱えている本質を浮かび上がらせることを第一にしています。
- 3、作品を読んで触発された問いや疑問、作品を離れての思考も大歓迎ですが、“その問いはこの作品だからこそか?(作品の本質に即した展開や発展的な問いか?)”という結び目だけは、それなりに重視したいとおもいます。

そのため、以下の**心がまえ**をご確認ください。

- a) 対話をする相手(参加者、テーマ、作品)にたいして敬意をもつ
- b) ひとの話は最後までしっかりと聴く
- c) 自分のことばで、なるべく簡潔に、意見を述べる
- d) よくわからないことや違和感などに、「わからない」と態度を示す。なるべく自然体でのぞむ
- e) 意見の批判は◎、相手の人格を攻撃することは× これを峻別する
意見(発言)は問いを深めるための“目印し”。その批判は決して人格攻撃ではない

* << 正論(意見)ってのはあくまでも自分っていう潜水艦の周囲の状況を確認するために発信するソナーなんだよ。自分が正しいと感じる、信じる意見をポーンと打って、返ってくる反響で地形を調べるのだ。ソナーで道が拓けるわけじゃない。>> (「ビッチマグネット」舞城王太郎、2009)

- f) 発言や意見・態度の表明は強制しない/されない

このような心がまえで読書会に臨むと、**副次的なものとして**こんな態度が身につくかもしれません

- 自分の考えが変わるということを、体験を通じて受け容れることができる
(自己変容の可能性)
- 間違ってもいいんだという体験を、安心安全な場所で得ることができる
(可謬性の獲得)
- 他者の気持ちや視点に立って考えを組み立てることができる
(立場の入れ替え、他者への想像的な同一化)
- 問いを深める思考力を養うことができる
(探求能力の涵養)
- ひとりではなく集団での対話や議論に協調できる
(共通了解志向型の態度の獲得)

【推薦のことば】 推薦者:松村さん

「学生時代に出会って以来、折にふれては読み返すお気に入りの小説です。男女の群像劇としても十分楽しめますが、随所に散りばめられた『哲学的問い』によって、ついあれこれと思考を巡らせたいくなる、そんなところも魅力のひとつだと思います。この小説を介してみなさんとお話できるのを楽しみにしています。」

〈ぼくがこの作品を選んだ理由 池澤夏樹〉

静かな生活に政治が暴力的に介入する。満ち足りた日々は抑えきれない欲望に乱される。派手なストーリーに人生についてのしみじみと深い省察が隠れている。これが現代に生きる知的な人間の姿だ。ぼくはテレザともサビナとも暮らしてみたい。

一度は数のうちに入らない

「一度だけおこることは 一度もおこらなかったようなものだ。人がただ一つの人生を生きうるとすれば、それはまったく生きなかったようなものなのである」

【問い】 (ご発言は必須ではありません)

*1)~3)は今回の推薦者・松村さんが、4)は芹沢が提案のお題です

- 1)、どんな感想を持ちましたか。
- 2)、好きな登場人物を一人あげるとしたら誰ですか。その理由も教えてください。
- 3)、私たちが真に耐え難いのは、「軽さ」と「重さ」のどちらだと思いますか。
- 4)、小説冒頭の永劫回帰に関するあたり、この導入の仕方をどう感じましたか？
なぜこの小説に、この導入の仕方が必要なのでしょう？

【テーマ】 〈本棚拝見(リクエスト特集)〉

ふだみなさんはどのような本を読まれているでしょう。あるいは、過去にどんな面白くて、記憶に残る、大切な1冊をお持ちでしょうか。

不定期で開催している「リクエストシーズン」も今回で4回目です。毎シーズン、みなさんの個性的でユニークな選書と、それ以上に濃密な選書理由や対話の時間を提供していただいています。数ある朝さろんの開催回のなかでも、このリクエストシーズンがいちばん印象に残ってる、という方も大勢いらっしゃいます。今回のリクエストシーズンでは、いつもより長く期間を取って、より幅広い選書やそこでの対話の広がりを観察してみたいと思います。朝さろんとしては各回が、推薦者さんとの真剣なコラボレーションという形になります。

推薦書の魅力をきちんと紹介するのはもちろん、推薦者さんだからこそその「お題」や進行なんかもぜひ出していただきながら、そこに各回を通じて一定の朝さろんらしさもマッチングできればと思っています。本への熱烈な愛情だけでなく、参加者全員でその魅力を味わい、深いところで受け止められたらと思います。

推薦者さんの個性ともあいまって、各回ごとにきらきらと印象を変えていくであろうこの「リクエストシーズン」、ごゆっくりご堪能ください。みなさんからの推薦も引き続きお待ちしております。



【本】

『存在の耐えられない軽さ』 ミラン・クンデラ

初刊:『*Nesnesitelná Lehkost Byti*』1984年

翻訳単行本: 千野栄一訳『存在の耐えられない軽さ』(集英社、1993年)

翻訳文庫本: 千野栄一訳『存在の耐えられない軽さ』(集英社文庫、1998年)

西永良成訳『存在の耐えられない軽さ』(河出書房新社、2008年)

【ミラン・クンデラ (みらん くんでら)】

(Milan Kundera, 1929年4月1日 -)は、チェコスロバキア生まれのフランスの作家。チェコ共和国東部・モラヴィアのブルノ生まれ。プラハの音楽芸術大学 (AMU) 卒業。1963年発表の短編集『微笑を誘う愛の物語』で本格的な創作活動に入る。1967年に発表した共産党体制下の閉塞した生活を描いた長編小説『冗談』でチェコスロバキアを代表する作家となり、当時進行していた非スターリン化の中で言論・表現の自由を求めるなど、政治にも積極的にかかわるようになった。

1968年の「プラハの春」では、改革への支持を表明したことによって、ワルシャワ条約機構軍による軍事介入の後、次第に創作活動の場を失い、著作は発禁処分となった。1975年、レンヌ大学の客員教授に招聘されたためフランスに出国。1979年にチェコスロバキア国籍を剥奪、1981年にフランス市民権を取得。このころから母語のチェコ語ではなくフランス語で執筆活動を行う。1984年発表の『存在の耐えられない軽さ』が世界的なベストセラーになり、フィリップ・カウフマンによって映画化もされた。

小説執筆のかたわら、文学評論を手がけており、小説を「世界を相対的に捉えようとする、ヨーロッパが独自に生み出した芸術の形式」だと考え、セルバンテスをその最大の先駆者に位置づけている。また現代世界の運命と現実を捉えた小説家としてカフカ、ムージル、ヘルマン・ブロッホ、ハシェクらを高く評価し、中央ヨーロッパに現れたこれらの作家たちの系譜を継ぐものとして自らの作家活動を行っている。

父親のルドヴィークは著名なピアニストで、レオシュ・ヤナーチェクに師事し、後にヤナーチェク音楽院院長を務めた経歴をもつ。そのためクンデラ自身も幼少時から音楽教育を受け、小説の文体や構成に音楽的素養が反映されている。

【 Story 】

妻か愛人か、仕事か思想か、人生は常に選択を迫る。

優秀な外科医トマーシュは女性にもてもて。しかし最初の妻と別れて以来、女性に対して恐怖と欲望という相反する感情を抱いている。彼は二つの感情と折り合いをつけ、複数の愛人とうまく付き合うための方法を編み出し、愛人たちとの関係をエロスの友情と呼んで楽しんでた。

そんな彼のもとにある日、たまたま田舎町で知り合った娘テレザが訪ねてくる。『アンナ・カレーニナ』の分厚い本を手にして。その時から彼は、人生の大きな選択を迫られることとなる——「プラハの春」賛同者への残忍な粛正、追放、迫害、「正常化」という名の弾圧の時代を背景にした4人の男女の愛と受難の物語は、フランス亡命中に発表されるや全世界に大きな衝撃を与えた。

舞台は、1968年前後のチェコスロバキアのプラハ。主人公トマーシュは優秀な脳外科医だが、複数の女性と気軽に交際するプレイボーイでもあった。ある日、執刀のために小さな温泉街に行ったトマーシュは、カフェのウェイトレスで、写真家の道を志すテレザに出会う。街から逃げ出したかったテレザは、

トマシュを追ってプラハに上京してくる。うぶそうに見えたテレーザの、思いがけない情熱にほだされたトマシュは、彼女と同棲生活に入り、まもなく結婚する。

社会主義からの自由化の空気の中で、まずは幸福な新婚生活が始まったが、すぐにトマシュに女の影がちらつき始める。一度遊んだ女には見向きのないトマシュであったが、例外的な女もいた。自由奔放な画家のサビーナである。彼女とはお互いに束縛し合わない関係が長く続いており、彼女にも別に愛人がいた。

都市プラハで孤独に苛まれたテレーザは、毎晩悪夢に苦しむようになる。それでもトマシュのもとからは去ろうとしない。結婚生活が暗礁に乗り上げた頃、1968年8月20日、ソ連軍によるチェコスロヴァキア侵攻(英語版)の夜が来た。ソ連軍の戦車と、糾弾の声をあげる民衆の波に交じって、無心にカメラのシャッターを切るテレーザ。トマシュは彼女を守りつつ、群衆に交じってスローガンを叫ぶ。しかし次第に、チェコの民衆の声は弾圧され、再びソ連支配の重苦しい空気が流れていく。

トマシュはテレーザと共に、一足先に亡命していたサビーナを頼って、スイス・ジュネーブへと逃避する。テレーザはサビーナの紹介で、雑誌のカメラマンの職を得る。急速に仲を縮めるテレーザとサビーナをよそに、トマシュはサビーナとの逢瀬を続け、行きずりの女性とも関係を持つことをやめない。トマシュの止まない女癖の悪さ、生きることへの軽薄さに疲れ果てたテレーザは、手紙を残して、愛犬を連れてひとりプラハへと帰っていく。「私にとって人生は重いものなのに、あなたにとっては軽い。私はその軽さに耐えられない。」

ようやくトマシュは失ったものの大きさに気づき、ソ連の監視の厳しいプラハへと戻る。2人はこの時始めてお互いを理解しあった。自分の主義を曲げようとするトマシュは医者職を得られず、窓拭きの仕事に甘んじるようになる。やがて2人は、プラハを逃れ、地方の農村でつましくも幸福な生活を送っていたが、それも唐突に終わる。

後日アメリカで暮らすサビーナのもとに、2人が交通事故で死んだことを知らせる手紙が届いた。三角関係の恋愛といえど、大切な2人の人間を失ったサビーナは、異郷で涙にくれるのであった。

【プラハの春】

プラハの春(プラハのはる、チェコ語:Pražské jaro[プラジスケー・ヤロ]は、1968年に起こったチェコスロバキアの変革運動。










●背景

1956年のスターリン批判の衝撃は、ポーランドやハンガリーのように共産党体制の危機を引き起こすほどではなかったにしろチェコスロバキアにも波及し、1960年代に入るとアントニン・ノヴォトニー(党第一書記兼大統領)の統治体制は揺らぎ始めた。とくに、1950年代に猛威を振るった粛清裁判犠牲者の名誉回復問題、経済成長の鈍化に象徴される計画経済の行き詰まり、スロバキアの自治要求などをめぐって、ノヴォトニーに対する批判が高まっていった。

1967年に入ると、第4回チェコスロバキア作家同盟大会において、パヴェル・コホウト、ミラン・クンデラ、イヴァン・クリーマといった作家たちが党批判を行った。また10月末には、プラハで学生が学生寮の設備をめぐる抗議デモを行い、党指導部がこれを警察隊によって鎮圧する事態に発展した。それに加えて、党内においても、ノヴォトニーの国家・党運営に対して、スロバキア共産党側から強い不満が出された。こうした状況下で、12月にブレジネフが非公式にプラハを訪れた。ブレジネフからの支援を梃子に、事態の收拾を図ろうと目論んだノヴォトニーであったが、ブレジネフはチェコスロバキア共産党内の問題であるとして、積極的なノヴォトニー支持を打ち出さなかった(このときブレジネフは「Этот ваше дело(あなたたちの問題だ)」と述べたとされる)。結局、党内対立が解消されないまま開かれた12月の党中央委員会総会は、さらなるノヴォトニー批判一色となり、ノヴォトニーが兼任していた党第一書記と大統領職を分離する流れが固まっていった。



equality	equity
<p>Equality = SAMENESS</p> <p>Equality is about SAMENESS, it promotes fairness and justice by giving everyone the same thing.</p> <p>BUT it can only work IF every-one starts from the SAME place, in this example equality only works if everyone is the same height.</p>	<p>Equity = FAIRNESS</p> <p>EQUITY is about FAIRNESS, it's about making sure people get access to the same opportunities.</p> <p>Sometimes our differences and/or history, can create barriers to participation, so we must FIRST ensure EQUITY before we can enjoy equality.</p>

CONFLICT IN LITERATURE		
CLASSICAL	MODERN	POSTMODERN
 <p>MAN vs. NATURE</p>	 <p>MAN vs. SOCIETY</p>	 <p>MAN vs. TECHNOLOGY</p>
 <p>MAN vs. MAN</p>	 <p>MAN vs. SELF</p>	 <p>MAN vs. REALITY</p>
 <p>MAN vs. GOD</p>	 <p>MAN vs. NO GOD</p>	 <p>MAN vs. AUTHOR</p>

GRANT SNIDER

●プラハの春の意義・評価

1) 国際共産主義運動の分裂

共産党自身による共産党体制の改革の試みが「社会主義の祖国」ソ連によって押しつぶされた事実は、わずかながらも残っていた「現存社会主義」に対する期待・希望を一掃することになった。その結果、国際共産主義運動は分裂状態に陥った。

フランスやイタリアの共産党のように、プロレタリア独裁を放棄し、議会制民主主義の枠内での社会主義理念の実現へと方針転換を図る、いわゆるユーロコミュニズムが台頭する一方で、中国共産党はソ連のチェコスロバキア侵攻を「社会帝国主義」ないし「覇権主義」と厳しく非難し、1969年には中ソ国境紛争に発展して、中ソ対立は修復不可能な状態に達した。こうした国際共産主義運動の動揺は、後述するように、冷戦構造の変容、すなわちデタントをもたらす下地を提供した。

一方、キューバのカストロは、ソ連軍のチェコ介入については非難しつつも、共産主義体制維持については支持し、キューバ危機以来のソ連・キューバ間の不信感は解除されることとなった。

2) チェコスロヴァキア解体の芽

軍事介入によって改革目標の多くが頓挫する中、唯一実現されたのが連邦制の導入だったことは、少なからずチェコとスロバキアの間に亀裂を生じさせた。つまり民主化・自由化を犠牲にして連邦化という民族的利害の実現を優先させたという意識がチェコ人の改革派で持たれるようになった。この意識は、スロバキア人のフサークが「正常化」路線を推し進め、改革派やそのシンパに対する弾圧を強化し、経済資源を重点的にスロバキアに配分し、その工業化を進めたことによってさらに強まった。

1977年に出された「憲章 77」運動においても、その中心を担ったのはチェコ人であった。このようなチェコとスロバキアの政治主導層の認識の相違は、1989年のビロード革命後の移行政策をめぐる対立にも反映され、1993年の連邦解体につながる遠因となった。

●富山一郎「傍らで起きているが、既に他人事ではない」(『同志社 GS Vol.6 / 2015』)

http://global-studies.doshisha.ac.jp/attach/page/GLOBAL_STUDIES-PAGE-EN-73/80529/file/vol6-1.pdf

『以前グローバルCOEの事業として、「コンフリクトの人文学」というプロジェクトを行なったことがある。このプロジェクトにかかわる研究対象には、とりあえず民族紛争、宗教対立、地域紛争、国際紛争といった世界中のコンフリクトが、テーマとして設定されていた。しかし次第に浮かび上がってきたのは、論じられる暴力的状況とは裏腹に、研究それ自体の耐えられない軽さだった。この軽さを、「コンフリクトの安寧」とよんだこともある。

コンフリクトという概念は、力学的関係であると考えられている。そこには対立と同時に対立する力のベクトルを定義するベクトル場が前提とされている。力学系にはそれを定義する関数が存在するのだ。そしてこの耐えられない軽さは、こうした関数を定義する行為にかかわっている。関数を定義する行為は、関数を前提とする力学に巻き込まれることはないのだ。いわば、コンフリクトのアクターとして設定された他者を論じれば論じるほど、コンフリクトに巻き込まれたくないという研究者の隠された身ぶりが浮かび上がるのである。これが、「安寧」の正体だった。

だがしかし、いわゆる災害や惨事もふくめた暴力的状況とは、このベクトル場自体が液状化し、前提が踏み抜ぬかれていく事態でもある。力はおとなしくベクトル場に収まりはしない。したがって真の意味でコンフリクトとは、対立ではなく、対立を定義するその前提自体の崩壊なのだ。そこには安寧の場所は既になく、観察できる他者もない。生起する状況は、傍らで起きているが既に他人事ではなく、観察者自身の場所に浸透し、研究行為自体を巻き込んでいく。COE のプロジェクトでは、ここに出発点を据えようとした。そしてそれは、やはり危機の問題でもある。』



●松岡正剛「千夜千冊 意表篇第 0360 夜 - 存在の耐えられない軽さ」

<https://1000yaisis.ne.jp/0360.html>

『読んでもらえばすぐわかるように、『存在の耐えられない軽さ』の第1行目には、「ニーチェの永劫回帰という考え方はニーチェ以外の哲学者を困惑させた」と書いてある。

こんな始まりかたはとて小説の冒頭とはおもえない。いったい何をやる気だという感じがする。まして、ニーチェである。けれども、『冗談』も『生は彼方に』も、そして『不滅』も、クンデラはいつもこのように、自分の思索の奥底に揺動するものから、物語を書きはじめるのである。そして次のパラグラフには、こともあろうに「永劫回帰の世界では、われわれの一つ一つの動きに耐えがたい責任の重さがある」、つづいて「もし永劫回帰が最大の重荷であるとすれば、われわれの人生というものはその状況の下では素晴らしい軽さとしてあらわれうるのである」などと書く。

これでは小説家に説教されているようで、とうてい気楽に小説を読むわけにはいかない。少なくともぼくは、ニーチェに導かれて小説を読みたくはない。

それでもまだクンデラは手をゆるめない。次の行ではこの物語の主題をあっさり明示してしまう。いや、臆面なく、あるいはぬげぬげとといったほうがいいかもしれないが、「だが重さは本当に恐ろしいことで、軽さは素晴らしいことであろうか？」というふうには。

これでは、『存在の耐えられない軽さ』という標題がそのまま主題であるんですよというカラクリを冒頭からキャプション説明しているようなもので、とうてい物語にはなりそうもない。ふつうなら、こんな書き出しの小説なんて、絶対に読む気はおこらない。なんという理屈だとおもいたくなるに決まっている。少なくともぼくはそういう性(たち)だった。

ところが、そのように読者が気まずい思いをするかしないかという直前、それは小説を読みはじめてせいぜい数分後であるのだが、クンデラはすばやく次のように書いて(まさに読者の退屈な表情を測ったかのように)、そのまま虚構と現実のあいだにわれわれを連れ去ってしまうのだ。

「私はトマーシュのことをもう何年も考えているが、でも重さと軽さという考え方に光を当てて初めて、彼のことははっきりと知ることができた。トマーシュが自分の住居の窓のところに立ち、中庭ごしに向こう側のアパートの壁を眺めて、何をしたらいいのか分からないでいるのを私は見ていた。トマーシュがテレザと会ったのはその三週間ほど前のことで、ある小さなチェコの町でであった。二人は一時間も一緒にいたであろうか。彼女はトマーシュを駅まで送り、彼が汽車に乗り込むまで、待っていた」。

これがクンデラなのである。ここから先は一瀉千里、われわれはトマーシュとともにクンデラの正確な思索の揺動をたどってしまうのだ。

どうだろうか。ぼくがちよっと悩んだ理由がおわかりいただけただろうか。ようするに、クンデラは小説の書き方を小説にするべく、小説という散文様式を選び、その選び方そのものにクンデラの思想と物語の展開とを重ねているわけなのだ。

(略)しかしクンデラは、「小説」というものなど世界に存在しないと考えている。クンデラにとっては、フランス人の小説、チェコ人の小説、日本人の小説というものがあるだけなのだ(これはものすごく正しい)。そのうえで、作家というものは自分が「書こうとする世界の様式」を問いつづけるために書くのだと結論づける(これもものすごく正しいのに、なかなか実行されていないことだ)。加えて、何を言葉として選択したのかということを読者に伝える以外に、作家が読者に伝えるものなどないのだと宣言をする(まさにこの宣言がクンデラだ)。』

あらゆる予見は間違ふ。それが人間にあたえられている稀な確信のひとつだ。——クンデラ

●「『ヨーロッパ』という寓話 ——ミラン・クンデラをめぐる」 安永愛

『AZUR』第 3 号(成城大学フランス語フランス文化研究会, 2002 年 3 月)

『クンデラによれば、神が笑うのは、人間が考えても、真実は人間から逃れ去ってしまうからであり、複数の人間が考えれば、たがいに考えることは違い、また、人間が自分がそうであると考えているものでは決してないという、その根本的な滑稽さからなのである。小説とは、性急に判断を下すのではなく、あくまで世界の多様性と相対性を、その豊かさまるごと描き出すことが可能なジャンルである。判断を宙吊りにし、真面目とも不真面目とも判別できないようなあわいで、実験的な思考も可能となる。「小説の精神」とは、「不確定性を不確定性としてうけとめる聡明さ」に発するものであり、絶対的真実を追究する宗教やイデオロギーとは、ベクトルを異にする。クンデラの思い描く「神の笑いのこだまとして生まれた芸術」である小説の敵は、アジェラスト(ラブレエの造語であり、笑わない者たちという意味)、紋切り型の無思想、キッチュであるという。そして更にクンデラは、こうした三つの敵と闘う小説という創造的空間は、近代ヨーロッパとともに生まれ、またそれは、ヨーロッパのイメージそのものであると断言するに至る。』

●クンデラ『小説の精神』 *L'art du roman* (1986) (「七十三語」(“*Soixante-treize mots*”)所収)
ヨーロッパ Europe 中世期、ヨーロッパの統一は共通の宗教に基づいていた。近代を迎えるに及んで、宗教はその地位を文化に(文化的創造に)明け渡し、文化はヨーロッパ人がそれによって自分を認識し定義し同定する、さまざまの至高の価値の実現となった。ところで現在、今度は文化がその地位をあげ渡している。だが何に、誰にか。ヨーロッパを統一できるような至高の諸価値が実現するのはどの領域であろうか。技術的偉業だろうか。市場だろうか。民主主義の理想、寛容の原則をかかげる政治だろうか。しかし、その寛容がもう豊かな創造や力強い思考をなんら擁護することがないならば、それは、空疎で無用なものになるのではないか。あるいは、文化の退位を天にも昇る心地で身を任すべき一種の解放と受け止めることができるだろうか。私にはわからない。私はただ、文化はすでに屈服してしまったと自分が承知していると思っているだけである。こうしてヨーロッパの自己同一性のイメージは遠ざかる。ヨーロッパ人。つまりはヨーロッパに郷愁をいだく人。(「ヨーロッパ」)

●クンデラ『不滅』 *L'immortalité* (1990)

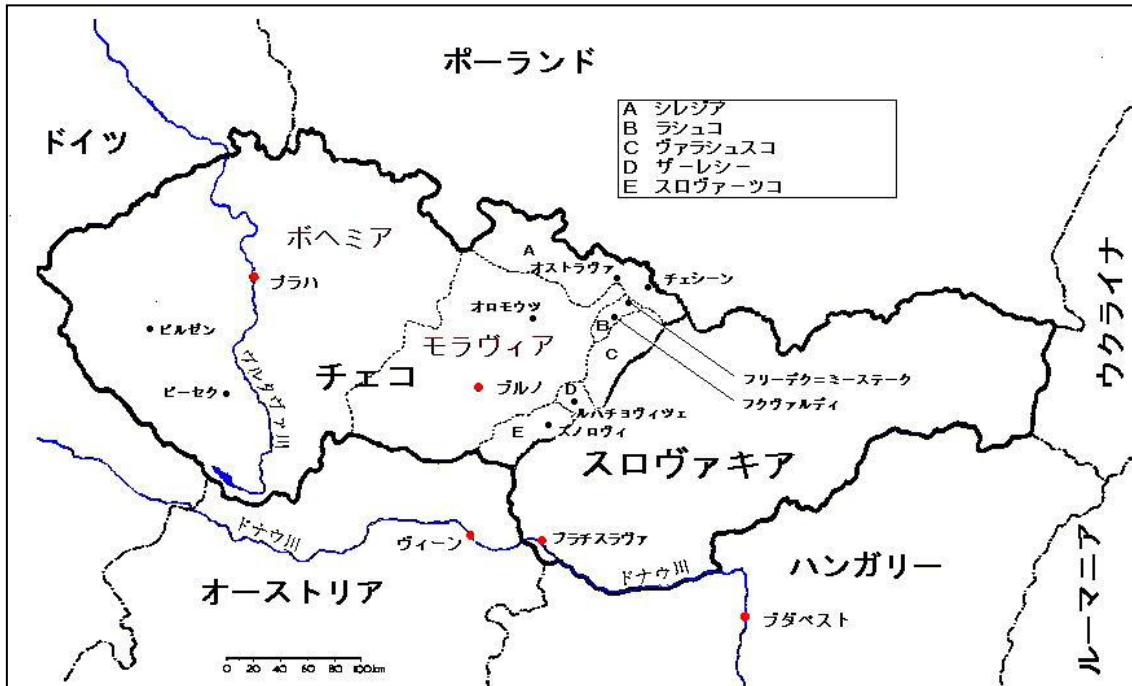
わたしは、これら全ての交響曲の完璧さに異議を唱えているのではないのです。ただその完璧さの威光に異議を唱えているんです。それら超崇高なる交響曲は無用の大聖堂でしかない。人間には近付けないんです。非人間的なんです。昔からずっと我々はそういう威光を誇張してきました。そのせいで劣等感を持たされました。ヨーロッパは自身を五十ほどの天才的な作品に還元してしまったのですが、ヨーロッパはそれをまるで理解してこなかったときている。この酷い不平等をよく理解してください。全てを代表する五十の名声に対して、何も代表することのない何百万ものヨーロッパ人？ 階級の不平等なんてちっぽけなことですよ、一方を砂粒に変え、しかるに他方には存在の意味を授ける、この形而上的な不平等に比べればね。

ヨーロッパ。偉大なる音楽とホモ・センチメンタリス。同じ揺籃に並んで寝ている双生児
——クンデラ

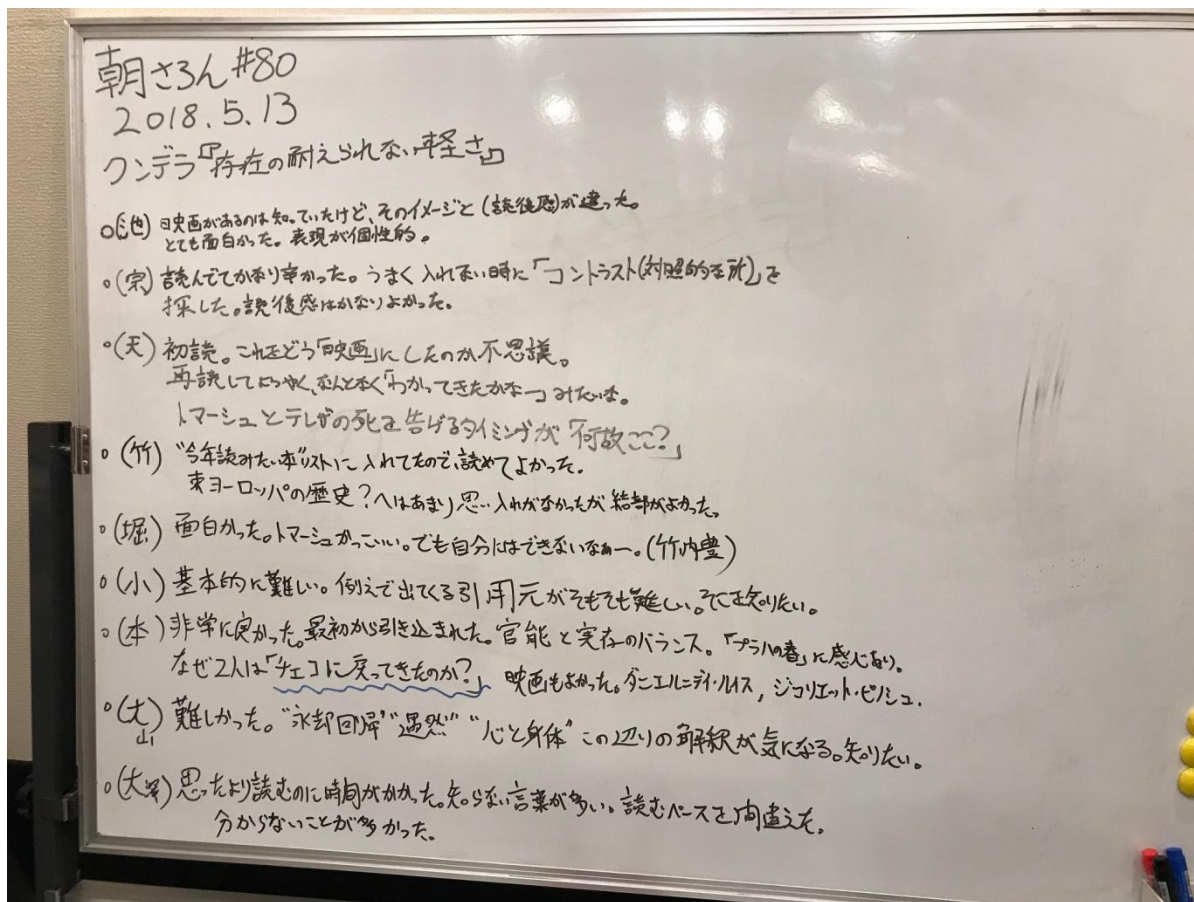
今後のラインナップ / テーマ 〈本棚拝見(リクエスト特集)〉

- ▼#81 6/17(日) 『影との戦い/ゲド戦記1』 アーシュラ・K・ル＝グウィン
- ▼#82 7/9(日) 『夜と霧』 V・E・フランクル
- ▼#83 8/5(日) 『芋虫』 江戸川乱歩

【原則、毎月第2日曜のAMに開催】



参加者からの感想



- 映画があるのは知っていたけど、映画のイメージと小説の読後感がずいぶん違っていた。面白かった。表現が個性的だと思った。
- 読んでいてうまくのれずかなり辛かった。物語の世界にうまく入れていないときには作品内に存在する「コントラスト(対照的な箇所、要素)」に注目することになっている。読後感はかなりよかった。
- 初読だった。これをどう映画(映像)にしているのかが不思議だった。再読してようやく、「なんとなくわかったかな」というくらいの印象。主人公であるトマーシュとテレザの死が物語の途中ではややと告げられたのが驚きで「なぜここで?!」と思った。
- 個人的に“今年読みたい 本リスト”に入れていたので、今回取りあげられてうれしかった。東ヨーロッパの歴史にはあまり興味もなく情報も乏しかったのだが、結末部が非常によかった。
- 面白かった。トマーシュがかっこいいなと思った。でも自分には真似できない。日本人でいえば竹之内豊のイメージ。
- 基本的に難しい小説だと思う。引用や比喩がさらに難しいイメージ。学術的。なのでこの辺りのことについて、引用の意味、関連性など詳しく理解したい。
- 非常に良かった。最初から引き込まれた。実存と官能の結びつき具合が絶妙だと思う。個人的には「プラハの春」など東欧の歴史的背景そのものにも関心あり。問いを立てるとするならば、「なぜ二人はチェコに戻ってきたのか？」ということになるだろうか。トマーシュがテレザを追って、というプロット上の意味に留まらず、チェコからパリに亡命しビロード革命後にも母国に帰らなかったクンデラ自身にも接続させて考えてみたい。余談だが映画版も非常に良い出来だったと思う。



- 難しい作品だなと思った。“永劫回帰”、“偶然”、“心と体”この辺りのキーワードの解釈が気になる。ぜひ知りたいのでじっくり考えてみたい。
- 思ったよりも読むのに時間がかかった。知らない言葉も頻出し、読むペースを見誤った。わからないことが多かったので、そこをいろいろ話し合ってみたい。
- アインシュタインとヒトラーがよく似てる、とか、人生と歴史はどちらも似たようなもの(軽い)、というような書きぶりは、意図的であるとはいえ、個別性や歴史なかの複数性という要素をあまりにも軽視した齟齬ものの発言でもあると思う。たとえばヒトラーに虐殺されたユダヤ人はどう感じるか。ドイツ国民はどう見るか。“永劫回帰”という考え方を自分自身のみでなく、実際の歴史や他のひとの人生にあてはめると、どうしても(作品内の)他者の人生について「軽い」とか「どれもにたりよったりだ」という見方をとらざるを得ない。そこには“永劫回帰”とはまた別の、倫理的な問題も関係してくるかもしれない。
- ヨーロッパ中心主義的なエリート的な自意識も若干鼻に着くが、それでも「うまい、面白い」と思ってしまう物語なので、なんか悔しい。
- わからない箇所は、意味のとりにくい箇所は確かにあるが、読者はそこを厳密に言語化することなく「なんとなくこうかな」というゆるいイメージで読み継ぐことができるし、無理に空隙を埋めようとせずまずはそれでいいと思う。わかるためには、対話(意見交換、解釈)だけでなく、時間をかけて何度も再読していくことがかなり大事なのではないか。そういう意味で「再読したい」と思わせるためにはどんな要素が大事になってくるだろう。
- サビナは「誰の」、「どういう視線」を必要とする存在なんだろうか。
- 登場人物がそれぞれに、異なる“唯一性”を求めてはすれ違うような構成。サビナはプライベートを大事にし、経歴ロンダリングのような真似までする。そして、そうでいながら、「誰かに完全に理解される＝誤解のない言葉を与える」ことを求めて孤独を抜け出せない。トマーシュは身体的接触のなかに発火する百万分の一のきらめき、というとても抽象的で目に見えないものに憧れ続け、目の前になるものを十全に大切にできていない。テレザは生まれ育ちの経験から、自分自身の体(≡自分の存在そのもの)に満足できていない。この「わたしの身体」だけを唯一絶対だと認めてもらふことを愛の一部として位置付けるが、それゆえに、トマーシュとは決定的に合わない。それゆえ無駄に傷つき、拳句に自身も浮気をしてしまうことになる。
- それでもそこになにか「愛」のようなものを感じるのはなぜか？
- そもそも、本作における愛とは、一体なにか？
- 十全に愛があれば、「重く」なれるのか？
- 愛がないと(?)あるいは、愛がないから(?)「軽い」のか？
- 歴史が「軽い」ということと、個人が「軽い」ことは、愛だけでは共通しないのでは？

今回、朝さろん『存在の耐えられない軽さ』に参加して頂き、ありがとうございました。
さまざまな意見、問い、人物評価等々を聞くことができ、私自身とても楽しい時間を過ごすことができました。
みなさんがしっかりとこの小説を読み込んでくださったことが伝わり、それだけでもありがたい気持ちです。まだまだ問い足りない部分もたくさんありますし、いつかまたこのような会ができれば...と思っています。
ありがとうございました！

松村

以上

ご参加どうもありがとうございました♪

